

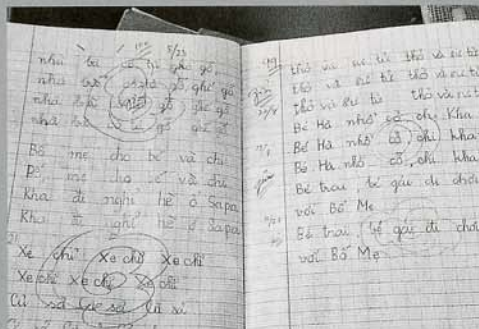
授業中おとなしい子どもたちが、休憩になると普段の元気をとりもどす



おやつのはじめは貴重な情報交換の場でもある。正面中央が西山さん



母親全員が参加するベトナム語教室は、授業も共同作業である



宿題は、授業中別の母親がチェックする。子どもたちに声調記号はむずかしいようだ

外国人 と生きる

ベトナム語の架け橋として

庄司 博史
(しょうじ ひろし)

民族社会研究部

毎月第二、第三日曜日に開催されるベトナム語教室はもう三年目をむかえた。当時四家族の子ども六人を相手におそろおそろはじめた教室も今では二〇人近くまで増え、学力に応じてニクラスを設けるまでになった。とびかうのはベトナム語のみ、日本にいることをしばし忘れるほどだ。藤沢市善行でこのベトナム語教室をはじめたのは西山さんだった。ベトナム語教師の経験もなく、教材も手作り、ほとんどゼロからの出発であった。

じつは西山さん自身もベトナム人である。本名はファン・ティ・タン・ツイ。一九八〇年代後半、先にベトナムからインドシナ難民としてやってきた父親の許に家族とともに合流した。来日した当時、すでに中学三年生であった彼女にとって日本語を身につけるのは並大抵のことではなかった。日本の中学一年に編入したが、定住促進センターで三カ月学んだ日本語はやつと挨拶程度で、授業はまったく理解できなかった。三年間は日本語の獲得のため全力を費やした。先生や友人の協力も忘れられない。おかげでまったく自力で京都のカトリック系高校に入学できた。その後、看護学校で准看護師の資格をとり、関東の病院で日本人とまじって働いてきた。

しかし、すべてのベトナム人が彼女のようには日本社会にとけ込み、また十分に能力を発揮できる場を見付けているわけではない。特に成人としてやってきた人にとって、日本語の能力不足が原因で、ベトナムで養った知識や技術を日本で生かすことは何年たっても最大の難関である。また日本の文字がわからないため、役所で

での手続きや子どもが学校から持ち帰る通知の理解に不自由している人も決して少なくない。一方、日本で生まれた子どもたちにとって、次第にベトナム語は外国語になりつつある。そのため日本語の不自由な両親とはコミュニケーションが十分成り立たないケースさえある。

現在日本には約二万六〇〇〇人のベトナム人がいる。そのうち約三分の一が、かつてインドシナ難民として来日した人びとと、その呼び寄せ家族である。彼らの多くは、関東から東海、そして関西のいくつかの都市に数百人の単位で比較的多く暮らしている。慣れないことばかり来る不自由さと情報不足を補いあい、かざられた余暇を仲間同士で過ごすため、職場や公営住宅を中心にベトナム人が集まる。小さなベトナム人コミュニティがそそぎを支えてきた。

とはいえ、日本での生活も二五年あまり経過し、ベトナム人コミュニティも少しずつ変化している。若い人びとの多くは日本語になじみ、生活の根を日本社会に活躍している人もめずらしくない。日本で生まれたベトナム人二世も成人して家庭を築きつつある。西山さんのように日本名をもち日本国籍を取得した人がすでに数百人にも達している。日本社会に時折見られる外国人差別ももちろん理由のひとつだが、一方でグローバル化のなかで本国や故郷との結び付きを保てる安心感が決断を支えた面もある。

しかし国籍を取得し、日本名をもった今も、こまめに習慣、考え方をまったく日本人になりきろうとは、西山さんは

思っていない。人間関係のすざんだ日本でベトナム人家族や友人の絆はかえがたいものだ。今の日本人にはついていけないところも多い。そして、なにより子どもたちが伝えたいのがベトナム語である。日本語はうまくてもないが、ベトナム語も子どもたちにとって大切なものがある。故郷や家族との絆を保つうえで不可欠だし、ベトナムとの交流が活発化するなか、ベトナム語は将来きつと役立つだろう。この国でも外国人にとつて、ふたつのことは、ちよつとした運命でもあり、可能性でもある。そして、ことばの大切さはなによりも自分たちが経験してきたことだ。しかし日本には外国人に出身国のことばの教育を保障する制度はない。

西山さんが三年前ベトナム語教室をはじめたのは自分の二人の子供にベトナム語を教えようとしたのがきっかけであった。かつて、ボランティアとしてベトナム語教室や保育活動に参加した経験をもとに、自分で公民館の一室を借り友人に呼びかけてはじめた手作りの教室だった。すべての母親が授業や宿題点検に参加するのは今も変わらないが、あとの懇談会は貴重な情報交換の場となった。

今、日本では多文化共生ということばがはやっている。自分たちのように、ベトナム人としてこまめに誇りを保ちながら日本に将来を託そうとする人びとを日本社会は受け入れるのだろうか。「ベトナム系日本人」と堂々と名乗れる日が来るのだろうか。それに賭けた自分たちに日本社会が出す答えを密かに西山さんは待っている。